

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 26 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500889

研究課題名(和文) 地域コアステーションとしての新しい保育モデルの構築と価値・機能の検討

研究課題名(英文) Study on value functionality, new childcare model as a regional core station

研究代表者

富田 久枝 (TOMITA, Hisae)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：90352658

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的はこれからの日本における新しい保育モデル(コアステーションとしての地域協働型保育)価値や機能を検討し、保育のスタンダードモデルの試案を作成することであった。主な研究方法は文献研究と先進的なアプローチを行っている事例の検討を中心に行った。また、海外(ニュージーランドやカナダ)の事例からもその有効性について検討を行った。その結果、保育における地域との協働はこれからの日本の保育実践において不可欠な課題であり、世界的にも重要な取り組みとして注目されていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to create a draft of the standard model of childcare and education site, and studied in Japan from this new nursing and teaching model (regional collaborative care as a Core station) functional value and features. Research methods principal the Center has done literature research and an innovative approach to case study. Also from abroad (New Zealand and Canada) case we consider its effectiveness. As a result, collaboration and community education is vital in Japan from this nursery, revealed as an important world-wide attention.

研究分野：乳幼児教育学

キーワード：地域 コアステーション 保育モデル ESD 共生と創造

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究に関連する国外の研究動向

国外の動向は 2005 年に日本が持続可能な開発のための教育：ESD (Education for Sustainable Development) を世界に提案し、10 周年を迎えて OMEP (世界幼児保育機構) の世界会議では乳幼児教育に関する ESD の成果が検討された。筆者はこの世界会議に参加して、日本で発信した概念である ESD が日本の乳幼児教育ではその研究成果が殆どないことに驚かされた。

(2)本研究に関連する国内の研究等の動向

国内の動向としては「子育て支援」が国レベルで推進され、幼稚園教育要領及び保育所保育指針などのガイドラインにおいてもその支援の必要性が具体的な支援方法が強調されて、子育て支援における「地域社会」との繋がりがや「地域の自然環境」に着目した研究が盛んに行われるようになった。しかし、子どもの育つ環境としての地域社会の文化・伝統そのものを保育環境や保育内容として実践的にその意義を検討した研究は殆ど行われていないのが現状であった。

以上のような経緯の中で、札幌市にある T 幼稚園の先駆的なアプローチ (幼稚園が地域共同体として機能する保育実践) に出会い、さらに 3.11 という東日本を襲った大災害の経験から地域・家族・親子の絆を保育現場で再構成、再創出する必要性を強く感じ本研究に着手した。

2. 研究の目的

以下の 2 点を明らかにすることを本研究の目的とした。

- (1) これからの日本の保育におけるコア・ミッションとしての地域協働型保育という新しい保育モデルの価値や機能について検討する。
- (2) 地域協働型のスタンダード保育モデルの試案を作成し、新しい地域創生の核となる保育実践モデルを提案する。(図 1 参照)

< 本研究の仮説 >

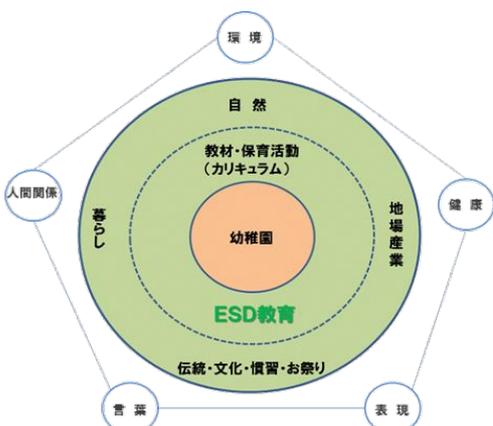


図 1 地域協働型保育モデル

3. 研究の方法

主な調査・研究対象と研究方法は以下の 4

点である。(表 1 参照)

(1)文献の検討

保育学研究、乳幼児教育学研究、OMEP ジャーナル等の保育実践や ESD に関する研究論文を概観してモデル構築の基礎を作る。

(2)質問紙調査

地域協働型の実践現場における価値や機能に関する調査を実施して検討する。

(3)実践事例の質的分析

先駆的な実践事例を収集して、インタビューや観察法等により質的なデータから保育内容や特徴をまとめる。

(4)海外における実践事例の収集

国際的な視点からの検討のために海外における実践についても情報を収集し、スタンダードモデルの構築に活用する。

主な研究内容		24 年	25 年	26 年
基礎研究	○保育現場の実態調査 (連携型・協働型の実践事例の収集)	→	→	→
	○先駆的事例の検討・視察調査	→	→	→
	○国内の研究動向のまとめ	→	→	→
	○海外の研究動向のまとめ	→	→	→
	○文献・資料の収集と総括	→	→	→
モデル構築	○地域の人的・物的資源の概念整理	→	→	→
	○保育現場の機能・価値を表す基本キーワード検索	→	→	→
	○モデル試案の作成	→	→	→
	○アクションリサーチによるモデルの修正	→	→	→
	○スタンダードモデルの構築と実践	→	→	→

表 1 研究の内容と流れ

4. 研究成果

(1)文献検討

< 保育学研究などの動向 >

本研究は保育現場における地域との協働を旨とした保育モデル作りという点から保育学研究 (保育学会) や乳幼児教育学研究 (乳幼児教育学会) などの研究論文について検討を行った。紙面の都合上、本研究がスタートした平成 24 年から 26 年の 3 年間の保育学研究の動向について本報告書では取り上げることとする。

「地域」に関する研究の動向

平成 24 年の保育学研究ではユージランドにおける乳幼児保育について取り上げているが、その内容は地域性では無く、評価に焦点を当てたものであった。また、平成 26 年に再びユージランド 就学前統一カリキュラムの作成過程に関する研究が掲載されていたが、この研究では先住民族のマリ族の教育とヨーロッパ系の移民民族の教育の、2 つの文化の教育を統一しようと考え、それぞれの文化が活かし合えるカリキュラム (テ・ファキ：統一カリキュラム) が作成されるまでの経緯が分析されていた。地域を捉えるときに、従来からある地域の歴史や文化をどのように理解し、新しい保育・教育内容を創出するかといった課題が本論文から推察できた。

平成 26 年の保育学研究ではスウェーデンにおける保育評価に関する論文と台湾における幼

児教育の現状を報告する論文が散見された。地域として世界的視野からその保育内容を概観する傾向は近年、乳幼児教育においても国際的な視点が求められるようになった結果かもしれない。また、同じ年度の論文に地域における子育て支援拠点事業を取り上げて、母親の自己成長を支援した論文が見られた。この論文では母親の成長を地域がバックアップしていく必要性が強調されていた。

保育現場における地域との協働

平成 24 年の保育学研究では展望論文として幼保小連携の課題と今後の方向性が取り上げられていた。この論文では、地域との協働の枠組みと方向性を示す内容が示されていたが、本研究のモデル作成には直接的な関連は見られなかった。また、幼稚園における稲作の意義の検討が行われていたがこの論文でも地域との協働としての保育内容という視点はほとんど見られなかった。

平成 25 年に保育学研究で保育の場における子育て支援の課題が展望論文で示されており、この論文では地域の子育て支援センターとの協働の重要性を示しているが、保育現場そのものが支援センター的な役割を果たし、コアセッションとしての位置づけを持つといった枠組みでの検討は行われていなかった。

平成 26 年の保育学研究では地域子育て支援拠点における困難や悩みを持つ親の支援を検討しており、地域の様々な専門機関が連携をしていくことが重要であると示しており、地域内の協働のあり方への示唆を得た。

< 諸外国の研究動向 >

諸外国の文献に関しては、現在、世界的に注目されているレゾ・ヨミア市（北イタリア）で行われている保育実践に関する書籍、ニュースレットで提唱している教育・保育統一カリキュラム、OMEP の世界会議で報告された発表論文等から世界的な動向を検討した。

その結果、レゾ・ヨミア市の保育実践はまさに、北イタリアという地域だからこそ創められた保育実践であり、地域の産業や地域のあらゆる資源がその保育教材として活用され、さらに子どもたちはその大なる自然（広義の地域環境）を自分の心の言葉でキャッチして自己成長するカリキュラムであり、今後の日本の保育にもそのような地域資源を最大限に生かした保育実践が子どもの心の成長に不可欠であると考えた。さらに、レゾ・ヨミア市の保育では家族と保育者がポートフォリオという保育記録を基にカンファレンスをもち、保育を共に作るという協働が行われていることも分かった。

また、ニュースレットの幼保統一カリキュラムであるテ・ファリについて文献研究を行った結果、レゾ・ヨミア市で使われている保育記録ポートフォリオと同じような役割を持つ、レーングストーリーという保育記録が存在していた。レーングストーリーは保育者が中心となって記録するが、その記録には子ども自身も、保護者や祖母まで自由に参画できる家族を繋ぐ保育記録であり

その教育実践の中核に位置付けていることが分かった。

OMEP の世界会議（アムステルダム）における研究発表においても、依然として ESD に関わる研究論文が多く発表されており、地球環境、自分たちの暮らす町、地域が教育の拠点、教育の原点という考え方が世界的な課題と言えよう。地域における文化、環境、伝統、経済様々なものを子どもたちに引き継ぎ、受け継いだ子どもたちは未来に向けて創造を重ねながら継承をしていくという教育のサイクルの重要性が改めて確認された。

(2) 国内における先駆事例の検討から

T 幼稚園による地域を創り、支える保育の実証検討

かつて地域共同体の中で子どもたちが大事に育てられた時代は終わり、地域共同体的教育環境は衰退し、核家族化が進行し、近年の日本の家族の風景は孤立の一途を辿っている。この傾向は、子育ての中心となる母親や父親の子育て不安やストレスを、増大させていると言われている。このような家族の教育環境としての危機的状況に一石を投じた保育が「T 幼稚園における地域コミュニティの再生と創造」であった。そこで、地域協働性を育み、地域の中で親子が育ち合う環境を提供している保育実践は日本でも希少な存在で、先駆事例として価値があると考え検討を行った。（図 2 参照）

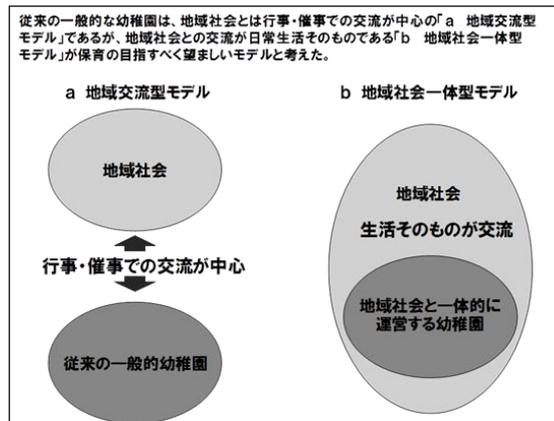


図 2 保育の地域交流型モデル a (従来型) と地域社会一体型モデル b (T 園) の対比

研究 1 では T 幼稚園の保育環境や保育実践を 2 年間、観察やインタビューにより情報を収集して、保育の質的な検討を行った。

その結果、T 幼稚園の一日は親子での登園から始まり、終日、希望者は親子で幼稚園の環境の中で共に過ごし、保育者からの支援を得ながら子育てを行う。そのために、保育内容もフルタイムでその日の自然環境や社会的な出来事等により保育者と親とで共に子どもを保育するというものであった。研究 1 の結果から、T 幼稚園における保育は幼稚園という保育施設を地域の核（コアセッション）として位置づけ、共同生活の場として機能していることが分かった。さらに、このような環境の中

で保育者も親も共に良きモデルとなりその中で互いに刺激し合いながら自己成長を遂げている姿がインタビューを通して明らかとなった。地域の人びとも気軽に足を運び、サポートネットワークも自然発生的に生れて、子育ての不安やストレスが解消されていることも明らかになった。

研究2ではT幼稚園に在籍していた(卒園児)又は、現在も在籍している(在園児)の母親8名と保育者6名に主体的な自己成長に関するインタビューを実施して質的に検討した。

その結果、T幼稚園の親は「新しい自分との出会い」や「当たり前前のごことに感謝できるようになる」といった自己への覚知が成長と捉えていた。一方、保育者は「自分で変わりたいと思う」や「新しい自分を発見する」といった積極的に自己成長への目標が有る中で保育実践を通して自己成長している姿が明らかになった。

研究1・2の研究結果からなぜT幼稚園を保護者も保育者も選び、自己成長を遂げようとするのかといったファクターを分析した結果、T幼稚園の選択意義の最も重要なファクターは「大自然に囲まれた親友家族」であり「心の解放」や「あるがままの自分」といった情緒安定要素も自己成長に関与していた。地域協働体的保育実践の効果はこのような心の安全基地の形成に有るのかもしれない。

恵庭市プレセター-の取り組みからの検討

恵庭市(北海道)という新しく開発された町が地域創生、内閣府「地方の元気再生事業」の採択を受けて、新しい「子育て支援」を展開した。この実践はニュー-ジ-ランドの子育て支援として根付いている「プレセター-」という親の自主運営型の子育て支援センターを日本で初めて自治体が運営するという画期的な取り組みであった。地域が主体的になって親を育てるという先駆事例として検討する必要があると考えて本研究対象とした。

まず、プレセター-という保育方法について十分に理解する必要があったため、ニュー-ジ-ランドのプレセター-に関する文献研究からスタートした。プレセター-は伴りしが発祥の地では有るが、現在のニュー-ジ-ランドで展開されているような形に整ったのはニュー-ジ-ランド式と呼べるようだ。この保育方法は60年の歴史を持ち、その保育目標は「家族と一緒に成長する」であり、「自由遊び」「親の学習」「親の協働運営」の三原則を掲げて推進されている。

研究1では、恵庭市におけるプレセター-の実態を明らかにするために観察・インタビューにより特に親の学習会と協働運営の実態を調査した。その結果を得て、従来からの市区町村で行っている子育て支援「ひろば活動」への参加者とプレセター-の参加者ではその必要としている支援が質的に違うのではという仮説を得ることができた。そこで、研究2では、同じ恵庭市における2つの子育て支援の親の実態やニーズからその価値や機能の違いを質問紙から検討を行った。本報告書では研究2について詳細に報告する。

2つの子育て支援を区別するためにプレセター-群を(恵庭)、一般の子育て支援群を(一般)として収集したデータを整理した。

まず、利用者の特徴はプレセター-利用者は30代~40代の親が多いが、一般の子育て支援利用者は20代~30代と若い層(第1子)の親の利用が多いことが分かった。

	恵庭		一般	
	度数	(%)	度数	(%)
10代	0	(0.0)	1	(0.8)
20代	9	(18.4)	27	(21.3)
30代	26	(53.1)	87	(68.5)
40代	14	(28.6)	11	(8.7)
50代	0	(0.0)	1	(0.8)
合計	49	(100.0)	127	(100.0)

表2 利用者の特徴・年齢

また、子育てを手伝ってもらえる可能性ではプレセター-利用者は「仲間」をその対象に選ぶという特徴が見られ、これは親が子育て支援センターを自主運営することで得られる仲間意識なのかもしれない。

※複数回答	恵庭		一般	
	度数	(%)	度数	(%)
①いい	2	(4.1)	6	(4.7)
②夫	35	(71.4)	102	(80.3)
③自分の親	21	(42.9)	62	(48.8)
④夫の親	14	(28.6)	45	(35.4)
⑤自分のきょうだい	8	(16.3)	17	(13.4)
⑥夫のきょうだい	1	(2.0)	5	(3.9)
⑦子どもが生まれる前からの友人・知人	1	(2.0)	12	(9.4)
⑧子育て中の仲間	20	(40.8)	6	(4.7)
⑨保育所・幼稚園・認定子ども園	14	(28.6)	20	(15.7)
⑩近所の人	1	(2.0)	7	(5.5)
⑪ファミリーサポートセンター	5	(10.2)	9	(7.1)
⑫その他	0	(0.0)	0	(0.0)

表3 子育てを手伝ってもらえる可能性

その他にも、プレセター-群は仲間と共に成長しているという主体的な成長への回答が多く、一般群は初めての子育ての入口、家では得られない体験の場所、家以外の居場所作りとして支援センターを利用しているという実態が明らかになった。



プレセター-の写真

ESD という視点からの地域における協働 地域アクションとしての保育の検討

ESD：持続可能な開発のための教育という概念は日本においても小学校以上の学校教育現場では環境養育として市民権を得るようになった。しかし、乳幼児を対象とした保育の領域においては、大多数の保育者が具体的な保育イシューを描くことは不可能な状況である。このような現状の中で、筆者は OMEP の活動を通して世界的な乳幼児を対象とした保育における ESD の実践に多く出会う中で、日本の保育においては ESD という概念は理解できなくとも、すでにその概念が内包され、実践されてきていると実感していた。そこで、保育に関連する学会の自主シンポジウムを何度も開催する中で、従来からある日本の保育を例に挙げて、ESD というフレームから「自然材としての木育」「保育者養成における ESD- いのちを大切に育てる心を育て教育」や「自然を活用した幼稚園の取り組み」「ねぶた祭りを取り入れた幼稚園の実践」について検討してきた。その結果、地域環境の重要性が明らかとなった。さらに、地域の文化や伝統を幼稚園行事に無理なく自然な形で取り入れて実践しているケースが多いことが分かった。これらの地域の環境や文化、伝統を結びつける人の「協働性」の観点やそれぞれの地域が持つ歴史や風土、特性をどのように保育に活かしていくかといった新しい課題が見つかった。

(3) 諸外国における取組の検討から

本研究では、日本の保育における地域協働型の保育のスタンダードモデルを先駆事例から検討しようと考え、研究を進めていたが、日本における事例は未だ少なく、地域協働型の事例を諸外国の実践にも対象を広げた。

具体的には、近年、幼保統一カリキュラム策定をいち早く推進したニュージーランドの保育実践に着目をした。ニュージーランドには先住民のマオリ文化とヨーロッパ系移民の文化との調和を図ることが統一カリキュラム策定では大きな障害でもあった。しかし、従来からその地に根差したマオリの文化を活かしてこそ、共生と考えたヨーロッパ系移民の人々の努力により、まさに民族の協働型保育実践を実現した。実際の研究推進にあたり、2 回ニュージーランドの保育施設（幼稚園、保育所、フレンドラー、家庭保育所）及び小学校を視察し、多くの貴重なデータを得ることができた。ニュージーランドの勇気ある取り組みは、これからの日本における幼保一体化や ESD の推進の良きモデルとなるであろう。加えて、保育実践の中で作成されている保育記録であり保育評価としても機能する「ラーニングストーリー」は子どもと家族を、子どもと子どもを、子どもと保育者を、保育者と家族を、家族・地域・国を繋ぐ、素晴らしい記録方法であることを視察により実際的に学ぶことができた。しかし、本研究ではその具体的な価値や、効果について検討は出来なかった。今後の研究を推進する上で、大きな課題と目標を得ることができた。

< 引用文献 >

- (1) 鈴木 佐喜子、ニュージーランドにおける乳幼児教育の文化・レビューに関する研究、保育学研究、50 巻 1 号、2012、61-71
- (2) 岩立 京子、幼保小連携の課題と今後の方向性、保育学研究、50 巻 1 号、2012、76-84
- (3) 亀山秀郎、幼稚園における稲作の意義の検討 KJ 法による保育記録の分析を通して、保育学研究、50 巻 3 号、2012、42-52
- (4) 大豆生田 啓友、保育の場における子育て支援の課題、保育学研究、51 巻 1 号、134-142
- (5) 飯野 祐樹、ニュージーランド 就学前統一カリキュラム Te Whariki (テ・ファリキ) の作成過程に関する研究 関係者への内外調査を通して 保育学研究、52 巻 1 号、90-104
- (6) 大野 歩、スウェーデンにおける保育評価の変容に関する研究 2011 年教育改革後の教育学的ドキュメンテーションに着目して、保育学研究、52 巻 2 号、6-17
- (7) 洪 福財、台湾における幼児教育の現状 形式的統合から実質的統合への挑戦、保育学研究、52 巻 2 号、150-161
- (8) 中谷 奈津子、地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化 支援者の母親規範意識と母親のエンパワメントに着目して、保育学研究、52 巻 3 号、9-21
- (9) 星 三和子、塩崎 美穂、向井 美穂、上垣内 伸子、地域子育て支援拠点における困難や悩みをもつ親の支援に関する考察 支援職の「語り」の分析、保育学研究、52 巻 3 号、22-33
- (10) 佐藤 学監修・ワタリウム美術館編、驚くべき学びの世界 レッジョ Emilia の幼児教育 (株) ACCESS、2011
- (11) 七木田 敦・ジューズ タンカ編著、「子育て先進国」ニュージーランドの保育 歴史と文化が紡ぐ家族支援と幼児教育、福村出版、2015

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

- (1) 冨田 久枝、岡田 あずさ、障害当事者とその親の成長に伴う経験と心情 先天色覚異常者とその親の語りの質的検討、千葉大学教育学部研究紀要、査読無、63 巻、2015、51-56
- (2) 冨田 久枝、上垣内 伸子、片山 知子、吉川 はる奈、田爪 宏二、名須川 知子、鈴木 裕子、藤原 照美、西脇 二葉、地域で育つ・地域を創る「乳幼児教育における ESD」 日本の保育における継承と創造を目指して、千葉大学教育学部研究紀要、査読無、62 巻、2014、155-162
- (3) 冨田 久枝、田爪 宏二、米澤 正人、幼稚園における子ども・親・家族の主体的な成長を支える保育実践 地域コミュニケーションの再生と創造、千葉大学教育学部研究紀

〔学会発表〕(計 10 件)

- (1) 冨田 久枝、石川 亜紗美、動物飼育における保育者意識と子どもの飼育態度との関連性 幼児期の動物・植物・モノへの生死に関する概念の発達を考える、日本発達心理学会、2015.3.20、(東京大学、文京区)
- (2) 冨田 久枝、吉川 はる奈、片山 知子、名須川 知子、上垣内 伸子、西脇 二葉、自主シボジウム、乳幼児教育における ESD 幼児教育実践史をめぐって、日本乳幼児教育学会、2014.11.29、広島大学・東広島キャンパス(広島県、東広島市)
- (3) 冨田 久枝、栗原 ひとみ、原田 友毛子、水畑 久美子、山下 みどり、教育カレッジの知見や手法を用いた育児・保育支援を考える Part、日本教育カレッジ学会、2014.11.1、鹿児島県県民センター(鹿児島県、鹿児島市)
- (4) Tazume Hirotougu & Tomita Hisae、Training Childcare Workers as Practitioners of “ Education for Importance of Life ”、OME66th World Assembly and Conference、2014.7.3、University College Cork (Cork city、IRELAND)
- (5) 冨田 久枝、名須川知子、片山 知子、西脇 二葉、上垣内 伸子、自主シボジウム、保育における ESD としての継承と創造 カナダからの発信、日本乳幼児教育学会、2013.11.24、千葉大学(千葉県、千葉市)
- (6) 冨田 久枝、名須川 知子、上垣内 伸子、藤原 照美、鈴木 裕子、吉川 はる奈、片山 知子、自主シボジウム、地域で育つ。地域を創る「乳幼児教育における ESD」日本の保育における継承と創造、日本保育学会第 66 回大会、2013.5.12、中村学園大学・短期大学(福岡県、福岡市)
- (7) 久保 瑤子、今井 美沙代、久保 隼人、冨田 久枝、砂上 史子、歌唱活動における、ピアノとギターの違いと幼児の身体表現、日本保育学会第 66 回大会、2013.5.12、中村学園大学・短期大学(福岡県、福岡市)
- (8) 冨田 久枝、菅原 幸子、A 君(知的障害児)の保育所における発達支援、日本発達心理学会第 24 回大会、2013.3.15、明治学院大学白金キャンパス(東京都、港区)
- (9) 冨田 久枝、宇波 加奈、月齢差に配慮した保育 保育者の意識からの検討、日本教育心理学会第 54 回総会、2012.11.24、琉球大学千原キャンパス(沖縄県)
- (10) 冨田 久枝、角井 都美子、芝田 智代子、小林 美佐子、前川 陽子、鈴木 裕子、丸山 陽子、身体機能の発達を促す遊びを通じての心の育ちに注目して、日本教育カレッジ学会第 10 回大会記念研究発表大会、2012.8.19、華頂短期大学(京都府)

〔図書〕(計 4 件)

- (1) 冨田 久枝(監修)、成美堂出版、事例でわかる保育所児童要録作成マニュアル、2015、159(1-159)
- (2) 冨田 久枝(監修)、成美堂出版、はじめてのマルチちょう 4 歳のちえ、2013、52
- (3) 冨田 久枝(監修)、成美堂出版、はじめてのマルチちょう 3 歳のちえ、2013、52
- (4) 冨田 久枝(監修)、成美堂出版、事例でわかる保育所児童要録作成マニュアル、2013、157(1-157)

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
冨田 久枝(TOMITA HISAE)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：90352658
- (2) 研究分担者
名須川 知子(NASUKAWA TOMOKO)
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：50145621
田爪 宏二(TAZUME HIROTUGU)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：20310865
- (3) 連携研究者
上垣内 伸子(KAMIGAICHI NOBUKO)
十文字学園女子大学・人間生活学部・教授
研究者番号：90185984
吉川 はる奈(YOSHIKAWA HARUNA)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：70272739
片山 知子(KATAYOMA TOMOKO)
和泉短期大学・児童福祉学科・准教授
研究者番号：50588506
- (4) 研究協力者
西脇 二葉(NISHIWAKI FUTABA)
元立教女学院短期大学・
幼児教育科・准教授
藤原 照美(FUJIWARA TERUMI)
神戸市立長尾幼稚園・園長
鈴木 裕子(SUZUKI HIROKO)
浪打カトリック幼稚園・園長
木村 仁(KIMURA HITOSHI)
札幌トイ幼稚園・園長
米澤 正人(YONEZAWO MASATO)
札幌トイ幼稚園・園長